

箕浦康子(1998) 仮説生成の方法としてのフィールドワーク. 志水宏吉編(1998) 教育のエスノグラフィー. Pp32 ~ Pp47. 嵯峨野出版,京都

rep. 松河秀哉

人類学者の研究手法であったフィールドワークは心理学、社会学、教育学でも重要な研究手法に。

しかし、ミクロなレベルで展開する人間の活動(教師の行動、園児仲間の文化など)の知見を得るには、文化人類学者の長期住み込み調査とは別の方法論が必要。

フィールドでの細かい観察から仮説生成を目指す、マイクロエスノグラフィー。

1. 仮説生成法と仮説生成法

実証研究では、研究手続きの問題と、データソースの問題に証拠方式の設定が必要

仮説検証研究・・・仮説をたてる データの収集・分析 仮説の検証

研究で得られたデータは、当該の理論の「まことらしさ」を判定する資料にはなるが、新しい理論の土台となることは少ない。

仮説生成研究・・・第1段階のデータ収集・分析(同時進行) そこで得た概念枠組みを用い第2段階のデータ分析

データに根ざした理論・・・データから立ち上げた現実をよりよく説明することを志向。

エスノグラフィー・・・他者の生活世界、他者が生きる意味世界を描くこと。

フィールドワーク・・・エスノグラフィーの素材を集める作業

2. フィールドワークとフィールドノート

・フィールドの3要件・・・1) 人(Actors)が、2) 何らかの活動(Activities)を、
3) やっている場所(Place)

ありふれた日常を見るには異人の目が必要。

a. フィールドワークのプロセス

「見る(Observe)」、「よく見る(Behold)」、「考える(Think)」、「つながりを見つける(Finding Connections)」。フィールドで発見したことを「書き上げる」。

エスノグラフィーの段階

第1段階・・・フィールドワークを行いフィールドノートを作成する

第2段階・・・フィールドノートの文字情報を分析し、データに名指した仮説を生成する

第3段階・・・仮説の既存の理論の中での位置づけを考察し、自分がフィールドで発見したこと、その解釈と論理的意味を他者に伝える。

以下では第1段階について述べる。

フィールドワークの特色

- 1.人々が生活を営んでいる中で (Insitu) データを取る
- 2.観察者が道具である
- 3.現在生起していることを直接把握する
「ものが見えてくる」という体験を研究者ができるかどうかを成否を分ける

「ものが見えてくる」ために

- ・「問い(リサーチ・クエスチョン)」を立てる。「土俵」と「問い」の違い。
- ・フィールドに入ったら、当初の「問い」からひとまず離れて、眼前で進行していることを何でもフィールドノートに書き留めてみる
- ・「問い」を解くために、必要なデータを決め、観察範囲を特定化する。

特定化するために

- 1.「問い」に関係する文献を読む
- 2.観察のユニットの作業定義を定め、そこから「問い」に答えるデータが得られるかを検討する
- 3.フィールドワーク開始後、収集できそうなデータとフィールドの特性を考慮し、観察範囲の調整や、ユニットの改訂を行う
- 4.改訂されたユニットのもとで、本格的な焦点観察を行う

b.焦点観察 (Focused Observation)

- ・研究設問の明確化と観察の焦点の決定、観察ユニットの確定と概念枠組みの模索は相補的

焦点を決め、焦点の事象や人物を網羅的に記述する

「空間(space)」、「事物(object)」、「行為(act)」、「活動(activity)」、「出来事(event)」、「時間(time)」、「行為者(actor)」、「目標(goal)」、「感情(feeling)」の9×9のマトリックスによるチェック (Spradley)

- ・「見れば見えるほど見えてくる」を経験することが大切
「よく見る (behold) 」 = look at、着目すること。

c.フィールドノートとは何か

- ・フィールドから戻ったあとで、メモをもとにフィールドの状況をできるだけ正確に復元した記録。フィールドワークの時間の2倍をできるだけ当日に、フィールドノートを書く時間として確保するのが望ましい。フィールドノートと覚え書きを分け、フィールドにでる前に覚え書きを読み返す。

3. データ分析：仮説生成へのステップ

a. 研究設問（Research Question）の確定と分析枠組の析出

混沌としたフィールドワークの現場で視座を定めるために

1. 問いを確定する
2. 分析枠組みを定める

フィールドに入り関連文献を読む、フィールドノートに繰り返し出現する事象に着目し、問いをよりフィールドにあったシャープなものに変えていく

b. 仮説の立ち上げ

- ・ フィールドノートに書き込んだ理論に関わる覚え書きから切れ味のよいカテゴリーを見つけだす リサーチクエスチョンに答える概念ツール（靴屋の例における「商品としての靴」「私物としての靴」、タイの例における「バンカップ・マイダイ」）

新しいカテゴリーを使って、フィールドノートの記録を再分析、事象間の関係を叙述を繰り返すプロセスの中で、仮説が立ち上がってくる。

4. 結果の解釈とエスノグラフィーの作成

フィールドワークの結果：観察した社会的現実の記述と、それに対する研究者の解釈を仮説の形で示し、それが当該分野の先行研究とどう異なり、何が新しいのかを示す必要がある。

a. エスノグラフィーで使う記述のレベルについて（タイの例）

フィールドワークで得られた知見を「高度成長期の文化プロセスと子ども」というテーマで示す

1. 一般的レベル（1980年代後半からの高度経済成長のインパクト）
2. 中間レベル（村の様子や、子どもが通う学校の様子）
3. 具体的レベル（親や教師の語り）

論文の最後は、フィールドで得たデータが持つ一般的意味の考察であり、論文としてできあがったエスノグラフィーには様々なレベルの記述が組み合わさっている。

b. エスノグラフィーの様々なスタイル

従来・・・構造機能主義

1980年代から様々なスタイルが現れる

- ・ 人物中心の民族史（person-centered ethnography）

描写される側の論理を優先し、彼らの生きた心理や感情を描写する

例（「須恵村の女」Smith & Wiswell, 1982：1935年から1936年にかけてのエラの日誌をもとに、村の女たちの主観的認識や経験に焦点を当て、当時の村人の生きた世界を再現）

フィールドノートにすべてを記載するのは無理。

- ・どのようなことに焦点を当ててフィールドワークをしたのか明らかにする
- ・分析の方法で見えるものが変わってくるため、分析に用いた概念ツールを明示する

マイクロエスノグラフィーでは被観察者や類似の立場のほかの文化の人々の解釈も合わせて記述することが注目を集めている。multi-voices method(Tobin,et al,1989)

分析結果は同じでも提示方法は多種。

結局は、フィールドワークのやり方や、カテゴリーの切り口のよさが決め手。機理屈次第で、同じフィールドノートから、複数の論文を書くことも可能。